

令和 7 年度宇治市総合教育会議 議事要旨

日 時 令和 7 年 7 月 2 8 日（月） 午後 7 時～ 8 時 3 0 分

場 所 市役所 7 階 特別会議室

《 次 第 》

【 1 】 開会 （19:00）

【 2 】 市長あいさつ

【 3 】 「乳幼児教育・保育支援センターについて」

・事務局説明

①乳幼児教育・保育支援センター（概要）

②乳幼児教育・保育の基本理念

③センターの取組

④保幼小連携

⑤研究・研修

⑥発達・子育て支援

・意見交換

【 4 】 閉会 （20:30）

《 出 席 者 》

宇 治 市 長 松 村 淳 子

宇治市教育委員会

教 育 長 木 上 晴 之

（教育委員）

教育長職務代理者 加 賀 爪 毅

委 員 中 筋 斉 子

委 員 小 山 栄 子

委 員 左 聡 一 郎

宇治市教育委員会事務局

部 長 福 井 康 晴

教育総合推進センター長 武 田 義 博

教育総務課副課長 亀 井 明 美

教育総務課主事 西 村 結 衣

副 部 長 川 崎 吉 隆

教育総務課長 柯 慈 樹

教育総務課主任 小 谷 野 里 紗

宇治市福祉こども部

部 長 波 戸 瀬 亮

乳幼児教育・保育支援センター担当課長 栗 田 益 典

乳幼児教育・保育支援センター長 雲 丹 亀 正 記

乳幼児教育・保育支援センター主幹 鶴 谷 真 希

1 開会

2 市長あいさつ

3 「乳幼児教育・保育支援センターについて」

【事務局・福祉こども部説明】

①乳幼児教育・保育支援センター（概要）

・設置目的

全ての就学前施設、保育所、幼稚園、認定こども園が、施設類型を越えたネットワークを構築し、「保幼小連携」「発達・子育て支援」「研究・研修」の3つの機能に基づく施策を推進することにより、保育士・幼稚園教諭等の人材育成を図り教育・保育の質の向上に資すること。

・専門部会

「乳幼児教育・保育推進協議会」を設置しており、その下にそれぞれの機能を持った、「保幼小連携専門部会」「発達・子育て支援専門部会」「研究・研修専門部会」の3つの専門部会を設置し公開の会議を開催している。

・経過

令和5年4月「乳幼児教育・保育支援センター準備室」設置

令和7年4月「乳幼児教育・保育支援センター」設置

・体制

組織は福祉こども部、職員は教育部、福祉こども部の計14名で構成

管理職員10名は相互に併任、教育部と福祉こども部が一体となって取り組む

・場所

ひがしうじ幼稚園園舎と本庁2階

・他市の状況

他市でも同様なセンターを設置しており、舞鶴市と亀岡市とは情報交換の会議を持ったところである。

舞鶴市：乳幼児教育センター

亀岡市：乳幼児教育センター

京都市：子育て支援総合センターこどもみらい館

②乳幼児教育・保育の基本理念

・理念

「育もう 未来のつばみ 咲かせよう それぞれの花 『ともに生きて ともに育ち ともにつながる』」

施設類型を越えた乳幼児期の基本理念と解説を、乳幼児教育・保育推進協議会での議論も踏まえ定めた。今後、この基本理念に基づいて、施策を推進していく。

③センターの取組

- ・「保幼小連携」では、架け橋ブロックごとの取組をコーディネートしていくことや、今後、架け橋期のカリキュラムの作成へつなげていきたいと考えている。
- ・「発達・子育て支援」では、各就学前施設に訪問して、それぞれの状況、課題等をお聞きして、連携していく取組や、専門職による園訪問支援では、就学前施設の先生方を支援する取組を実施している。
- ・「研究・研修」では、先生方のニーズがある、各施設類型における公開保育・公開授業の実施、また、グループワーク形式の研修により、施設類型を越えた顔の見える関係づくりに努めている。

④保幼小連携

(架け橋ブロックについて)

- ・架け橋ブロックとは、小学校区を基礎とした近隣の就学前施設との連携・交流を進めやすくする仕組みである。一部のブロックは小学校2校のところがあるが、基本的には小学校1校と、その校区内の就学前施設1から4つ程度で1つのブロックを作っており、全部で18ブロックある。
- ・小学校、就学前施設ともに、お互い連携をしたいが、どこの誰と連絡をしたらよいのか決めてほしいとの要望もあり、令和6年度に設置し、各施設の担当者を共有している。
- ・今は架け橋ブロックを活用して交流事業等に取り組んでいるが、いずれは架け橋ブロックを越えた連携もしていきたいと考えている。

(架け橋期について)

- ・年長児と小学1年生の2年間のことで、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくる重要な時期とされており、遊びを中心とした学びの芽を育む幼児教育から、学びの芽を伸ばす小学校へつながる時期であり、0歳から18歳までの学びの連続性を見通す中で、架け橋期の教育の充実を図ることが重要とされている。なお、小学校入学後は「スタートカリキュラム」、就学前施設の卒園前の時期は「アプローチカリキュラム」として、これまでもつながりを意識した取組がなされている。

(保幼小連携の流れ)

- ・連携の流れ
 - ①連携・交流の検討
 - ②顔の見える関係づくり：先生同士の交流、子ども同士の交流を実際に行う。

取組例としては、公開保育・公開授業・校庭遊びなどがある。
 - ③スタートカリキュラム、アプローチカリキュラムを互いに共有し、意見交換しながら改善に取り組む。
 - ④架け橋期の2年間のカリキュラムを一緒に検討・作成する。
 - ⑤カリキュラムを実施して改善していく。なお、②から⑤を繰り返していく。
- ・今年度は全ブロック・施設で②の交流事業等に取り組めるよう話し合いの場を持った。
- ・保幼小連携の取組

(縦の連携：幼稚園・小学校の交流)

令和5年度、6年度に南部小学校、東宇治幼稚園、かおり幼稚園で取り組んだ事業を紹介する。幼小の縦の連携として、5歳児が小学校を訪問して、大きな校庭を体験したり、ZOOMでの交流、先生同士で幼児教育と小学校教育の意見を交換した。また、小学校で「生き物だいすき」という生活科の授業があるが、その際、東宇治幼稚園のうさぎを小学校へ貸し出した。

子ども同士の交流は、就学前の子どもにとっては小学校への期待感を高め、小学生、特に1年生にとっては、小さな後輩ができて、先輩としての自覚を持つなどの面がある。

(横の連携：就学前施設同士の交流)

令和6年度は東宇治幼稚園からかおり幼稚園へ訪問し、鬼ごっこや遊具で一緒に遊んだ。

令和7年度はかおり幼稚園からひがしうじ幼稚園へ訪問があり、色水遊び等、園児同士が遊びの中で交流を深め、先生同士も交流を深めた。

公立と私立の幼稚園がこのように交流することは今まではなかった。

(南部小学校のスタートカリキュラム)

全員が前を向く座席配置ではなく、班机の形にして子ども同士の顔が見えるようにすることにより安心感を持ち、友達作りにつなげるようにしている。

入学後の数週間程度、1時間目開始前に「にこちゃんタイム」として、自分のやりたいこと、好きなことができる時間を設定している。この取組は、就学前と同じような遊びの時間を設けることで、早く友達関係を築き、担任の先生との距離感も縮め、学校が楽しい場所と感じられることで、そのあとの学習に入りやすくする取組である。

(架け橋期カリキュラム作り)

就学前施設と小学校がお互いの取組を知り、理解するために、交流事業等を通した顔の見える関係づくりが必要である。

(様々な交流事業例)

小学生が店員、幼児がお客さんになって実際に買い物をするお店屋さんごっこや、小学校で行われる左義長、施設が近いところでは合同の防災訓練に参加している。

先生同士では、お互いの授業をそれぞれ参観しあったり、合同研修を実施するなど、今年度も様々な取組を行う予定である。

(他校、今後の取組)

南部小学校と同様に、大開小学校や木幡小学校でも取り組んでいる。

大開小学校では1階の1教室でプレイルームを作り、神明幼稚園で使用していたおもちゃを置き、プレイルームの前に砂場を作るなど遊びの時間を作っている。

木幡小学校では、自分で選ぶ遊びの時間を設定し、先生の話聞く際には、就学前の時と同じように床に座る形で聞くなどしている。

架け橋ブロック会議をセンターで調整し、センターの職員も同席のうえ、全18ブロックで実施した。今年度に取り組む交流事業などを話し合い、昨年度以上に保幼小連携が進むと考えている。

今後もセンターがコーディネートを行い、交流授業等の取組を推進することで、保幼小のさらなる連携を図り、その先に架け橋期のカリキュラムを作成していきたいと考えている。

⑤研究・研修

(様々な研修)

- ・身体表現遊びについては、小学校の先生から、体育の授業に取り入れることができそうという感想があった。他にも、図書館司書による、絵本の読み聞かせ研修、就学に向けた発達面についてのフォローシステムを学ぶ研修がある。
- ・研修のテーマ等は専門部会や、現場の先生方の意見を踏まえて決めており、センターの研修である、「保育士等キャリアアップ研修」では、厚生労働省で定めるガイドラインに沿った研修として指定を受けている。研修はスキルアップを図る目的のほか、すべての研修でグループワークを設定しており、顔の見える関係づくりにも取り組んでいる。

(公開保育・公開授業)

- ・先生方から他の施設の保育や環境を見ることができ、非常にためになるという声も聞いており、今年度も公開保育・公開授業を実施していく予定である。
- ・例えば西小倉保育所では「子どもの主体性を育む環境構成と保育者の関わり方」というテーマで、園が他施設の方に見てほしいところ、意見が欲しいところをテーマに、実際に公開保育を実施している。

(今年度の取組)

- ・往還型研修をひがしうじ幼稚園で、各学期に1回ずつ全3回の公開保育を実施する。
- ・往還型研修とは、研修で学んだ内容をそれぞれの自園に持ち帰り、実践して、また次の研修に持ち寄って学びを深める研修であり、研修と実践を繰り返すことで、保育の質の向上を図っていくもの。参加者19人のうち小学校の先生から6人の申込みがあり、小学校の先生と就学前の先生が一緒に取り組む。
- ・専門部会での就学前の先生からの意見を踏まえ、不登校やインクルーシブ教育といった、小学校のテーマを設定した研修を実施予定である。小学校の状況や課題を知ること、乳幼児期に何ができるのかを考える研修を行う。
- ・管理職研修は、教育部と福祉こども部が合同で開催し、小中学校と就学前施設の管理職員に対して、保幼小連携の重要性やセンターの取組の紹介等を行った。このように一堂に集まり研修を実施することは初めてである。
- ・今後も研究研修の専門部会や、保育士・幼稚園教諭の意見を聞きながら、研究研修のメニューを検討し、教育保育の質の向上を図りたい。

⑥発達・子育て支援

- ・園訪問として、センターの職員が各施設に訪問し、子育て支援だけでなく、「保幼小連携」や「研究・研修」も含めて各園の状況や課題について意見を交換している。
- ・専門職の訪問として、気になる子どもの相談や、生活や遊びの中で工夫できる手だてと一緒に考えたいなどの様々な相談について、宇治市の専門職の発達相談員、保健師、府立こども発達支援センターの専門職などが、保育士や教諭等を支援する取組を実施している。
- ・移行支援シートの活用として、配慮を要する子どもの情報を就学前施設から小学校へ引き継ぐ移行支援シートについて、小学校が活用しやすいように様式を統一化して、読みやすい記入方法等、工夫をして活用するという研修を実施している。
- ・専門職の訪問の流れは、園からの依頼により、センターで日程等を調整して、専門職が訪問する。訪問後は、保育の観察など、園の様子を見てから、園の保育士へのアドバイスと一緒に考える時間を設けている。専門職の訪問は今年度からの取組であり、作業療法士や言語聴覚士の訪問と障害児保育指導員の訪問の二つがある。

- ・作業療法士や言語聴覚士の訪問では、療育に通っているこどもを中心に、クラス全体を見てもらい、「意欲を持って身支度を進めるためには」、などの視点でアドバイスをもらったり、身体的に支援が必要な子どもについては、他の子どもと同じ遊びができないので、その子どもに合った遊びや、挑戦できるような遊びを相談してアドバイスをもらう。
- ・障害児保育指導員の訪問では、保育支援課配置の専門職が、配慮を要する子どもを含めたクラス全体の保育についての相談や、注意を聞かないなど、集団行動ができない子どもへの声かけの仕方をアドバイスもらう。
- ・今後については、保育士や幼稚園の先生が子どもに適切に関わり、保護者への十分な支援ができるように、就学前施設のニーズに合った、専門職の園訪問や療育施設等の関係機関と連携し、就学前施設の先生方を支援していきたい。

【意見交換】

・センターについて

- ＜委員＞・架け橋期という言葉は、教育用語になるのか、それとも心理発達用語とか、そういうところで使われる言葉になるのか。どのような場面で出てくるのか。
- ・時期は、年長から小学校1年生までの時期を限定しているということか。
- ＜センター＞・文科省が発表している言葉で、年長から小学校1年生までの2年間を架け橋期と言う。
- ＜委員＞・保幼小連携の交流は、年に何回くらいあったのか。
- ・今年度からセンターが開設されたので、それまでの試験的な範囲で実施していたのか。
- ＜センター＞・各学校施設で状況が様々だが、紹介した南部小学校の昨年度の取組では、小学校と就学前施設の相互交流が、少なくとも3回程度あった。
- ＜委員＞・学期に1回ぐらいのイメージか。
- ＜センター＞・その通り。
- ＜市長＞・今回乳幼児教育・保育支援センターができることによって、小学校を中心に就学前施設とブロックを作り、そのブロックの中で就学前施設と小学校とが連携するという仕組みを作った。今までは連携しやすいところはブロック関係なくずっと行っており、連携しにくいところは行っていなかったのが実際の交流の状況。
- ＜委員＞・それを宇治市全域で同じように行うという取組を今年度から始めたということか。
- ＜市長＞・その通り。
- ・やり方は小学校や園によって異なるが、全体で取り組めるように架け橋ブロックで取組を進めている。
- ・学校や施設によっては前から進んでやっているところもあれば、今年度からやっとスタートするところもある。
- ＜委員＞・温度差があるけれども、今年度からは一斉にやるということか。
- ＜市長＞・準備は去年から始めており、今年度からは一斉に行う。
- ＜委員＞・笠取小学校と笠取第二小学校はどうか。
- ＜センター＞・架け橋ブロックの中で取り組んでいる。

- ＜委員＞・どこがグループになるのか。小規模校は交流の意義が大きいので具体的にどう
いうブロックになっているかを聞きたい。
- ＜センター＞・笠取小学校は、三室戸小学校、みんなのき三室戸こども園、あさひ保育園であ
る。みんなのき三室戸こども園とは去年、一昨年も交流を行っている。笠取第
二小学校は、御蔵山小学校と大谷幼稚園の2小・1園でブロックをつくっている。
- ＜委員＞・幼稚園や保育所あるいは小学校の現場からはどんな声が出ているか。
- ＜センター＞・架け橋ブロックにより連携相手が決まったことで、「連携しやすい環境が整っ
た」、「保幼小連携が進んだ」という声がある。例えばかつては就学前施設か
ら連携しましょうと小学校へ声掛けしていたのが、今年は、小学校のほうから
先に誘ってもらえたなど、連携ができていることを肌で感じるといった声を聞
いている。
- ・また、研究・研修では、コロナ禍で実技研修が減ってしまったので研修ができ
ること自体が非常にありがたいという声も聞いている。
- ＜委員＞・移行支援シートは今後も書式を修正しながら、存分に活用していただけたらと
思っているが、一方でプライバシーへの配慮が必要と思う。その点で支援シ
ートの中身の共有される範囲、共有方法・保存期間・処分方法はどのようにな
っているのか。
- ＜センター＞・移行支援シートの中身は、保護者と園の了解を得て一緒に作成するもの。シ
ート実物は、個人情報であるので、就学前施設から小学校へ持っていくことにな
っている。
- ＜事務局＞・保存期間等は、法令上の定めについては把握していない。ただし連携上、しっ
かりと確認ができるように、就学前施設から小学校であれば、その子が卒業す
るまでの間の6年間は、保存しておくことが望ましいと考えている。
- ・処分方法については、保護者も同じものを持っているため、学校に保管してい
る分は保護者の了解を得て溶解処分などをするということになると思う。
- ＜委員＞・保護者との架け橋という意味でいうと、今回センターを立ち上げてから、今ま
でになかった連絡手段ができたとか、保護者関係への新しい部分は何がある
か。
- ＜センター＞・センターの設置目的は、保育士や幼稚園の先生方の支援である。保護者に直接
何か情報を提供ということは、今のところはない。園の先生を通じて各ご家庭
へ情報提供することは考えられる。センターの取組をできるだけインスタグラ
ムで発信することはあるが、特段何か連絡手段云々というものはない。
- ＜委員＞・例えば、とある校区での取組を違う校区の保護者が先生又は子どもから聞き、
そんな取組があるのであればうちの校区もしてほしいと希望があり、意見を伝
えたいときに連絡方法が明確にあれば、なお吸収できるのではないかと思う。
- ＜市長＞・今の時点では、そういった仕組みはないので、今後課題にしたい。

・組織について

- ＜市長＞・センターは、今年の4月からスタートした。スタートまでの間に、乳幼児教育
の在り方や課題を協議会等の中で、検討を重ねており、それについてはご報告
したところ。
- ・組織を検討するときには、市長部局の福祉部と市教委の学校教育部門と連携し
ながら進めてきた。

- ・乳幼児教育・保育支援センターはひがしうじ幼稚園の中の2室を使って設置している。そこは執務室中心なので、例えばそこで研修会等はできない作りになっている。センターの職員は、センター内にずっと座っているのではなく、むしろ、外に出ていくという形をとっている。例えば、各保育園や認定こども園、幼稚園を訪問して、どういう状態で、何が課題であるのかということ进行分析し、今後のコーディネートをしてくれると思っている。
- ・市役所の本庁にセンターの一部を置いているのは、発達相談含めて母子保健・福祉部署との連携や、あるいは教育委員会の指導主事との連携など、まだまだ構築していかなければいけないものがたくさんあるということで、二つに分かれている。
- ・このような形でスタートしたが、これから先の療育施設との連携の課題点については今回の課題では少ししか触れていない。

＜センター＞・療育施設との連携の課題点については、資料には「療育施設等の関係機関と連携していく。」との記載がある。

・今後の課題について

＜市 長＞・市内に療育施設が複数ある。

- ・子どもの発達状況に応じて、週1回から週5回など通園頻度は様々である。
- ・週1回の方は、残りの4日は、保育園、認定こども園、幼稚園に通うことになるので、その連携が、子どもの発達という観点から見ると重要である。そのため仕組みづくり等はこれからしっかりと取り組むべき事項であると思っている。
- ・乳幼児教育・保育支援センターについて、今までの準備や課題を報告させていただいた。そこで、今後に向けてもう少し取り組んでいく必要があると思われる点を、教育委員という立場の中で、就学前の教育に対して、御意見をいただきたい。
- ・例えば、研修・研究のアイデアや、架け橋という観点での取り組みアイデア、さらに、小学校に上がったときに子どもたちの混乱・戸惑いが少なくなるのではないかと、という指摘があれば頂戴したい。現在、取り組んでいるものの拡充・充実するというアイデアでも結構である。また、新たな視点で、センターの今後についての意見でも構わないので、お願いしたい。

＜委 員＞・発達子育ち支援の中の専門職の園訪問の流れについて、これは今年度スタートするものか。

＜センター＞・その通り。

＜委 員＞・園訪問は、どんな形、どのようなイメージで、実施しているのか。

- ・例えば、今までの宇治市としては年長児サポート事業とか、園からの要請で専門員が園に行き、相談・指導はしていたが、それと、この園訪問との関係など、今年度、どういうイメージで支援につなげているのか。
- ・園訪問はすごく大きな意味がある。実際に園で話を聞くと、その子の育ちをどうサポートするかということが重要なため、園を支援することが大変重要になっているというのを実感する。
- ・例えば、5歳児の園訪問に同行したときに思ったが、すぐに療育等につなげるのではなく、園でしっかり見てほしいというケースが多い。お母さんたちにも

働きかけていく必要はあるが、先生方がその子たちを受け止め、保育して、就学に向けてその子たちの力を伸ばすことが必要な場合が多い。

- ・また、園訪問は1回行ったきりではなく、そのときに指導した子たちがどうなったかということを必ずリピートして、どういう育ちをしているかの振り返りも絶対必要になると考えているが、どうか。

<センター>・センターは、就学前施設の保育士や幼稚園教諭の支援が目的になる。例えば、先生方が保育の中で困っていることがあるということで、センターに要望があって、センターから専門職が行くというイメージを持っている。

<委員>・先生方からの要望はどのように吸い上げるのか。

<センター>・実際に訪問する。

<委員>・センターの事務員が先に訪問するのか、園からの依頼が先か。

<センター>・今年度はセンター開設初年度のため、センターの事務員が園に挨拶と専門職の紹介を兼ねて訪問した。

- ・今後は、園からの依頼もしくは相談等の中で、専門職を派遣するという話につなげていく可能性がある。

<委員>・各園に定期的に訪問するのではなく、園からの依頼があって初めて動くということか。

<センター>・その通り。

<市長>・センター職員はほぼ定期的に園に回らせていただく。

- ・センター職員は外に出ていく集団であり、御用聞きのような感じで、園の様子を見に行く。
- ・専門職の必要性については委員がお話しされた事業もしっかり引継ぎながら進めていきたい。
- ・専門職の園訪問の流れは、資料にあるものの、これで固めるのではなく柔軟に対応していく。

<委員>・具体的な例に作業療法士とか言語聴覚士の方の訪問と記載があったが、それはワンポイント。継続して見ていく視点も取り入れて、就学に向けての子どもの育ちを見据えていただきたい。

- ・専門職の記載がいくつかあるが、福祉との連携に関しての記載があまりない。子どもだけではなくて家庭に問題があって、先生方も大変というケースは多々ある。例えば、この子は要保護・要支援であるとか、お母さんもそういうご家庭であるとか、そのような情報をもらったときに動けるような専門職も在籍しているのか。

<センター>・現状は、こども福祉課に専門職がいる。内容によっては連携することになる。

<委員>・実は療育の先生方の中でも、家庭への支援をどのようにつなげるかは、よく言われている。センターは対応が困難なケースを指導してもらえんというイメージだったが、園で対応する先生を育てるとか、先生の園での力を伸ばして、子どもたちにいい育ちを提供するという形にだんだん固まってきているような印象がある。

- ・それならば、子どもたちへの支援という意味では、福祉の制度を熟知した人材が必要だと思う。要保護・要支援の場合は情報共有して対応できるケースもあり、センターの職員でそういう方は配置されていないのか。

<センター>・今は保健推進課で家庭の状況等を見て、要支援の家庭等については、こども福祉課と連携している状況である。

・センターは、先生に対して支援をしていく。そして、先生からの依頼は、保健推進課に入ってくるので、担当保健師により訪問をしているところ。そこでいろんな共有をしながら、対応している。

＜委員＞・センターは、それを引っ張っていく立ち位置になるのか。

＜センター＞・どこが引っ張っていくかは、難しい。

＜委員＞・何か動く必要がある際に、センターが、主としてそれをやっていくことになるのか。

＜市長＞・子どもの個別ケースの場合には、恐らく、ご家庭の問題を含めて全体で支援が進むので、センターが中心になるのではなく、センターを補佐する形で、こども福祉課が中心になると考えられる。

＜委員＞・園の先生をサポートするのであれば、センターが主体になるのか。

＜市長＞・その通り。

＜委員＞・そのような指導等の立ち位置の共通理解をもう少し広めていただきたい。

＜市長＞・センター発足から3か月経ったところであるので、これからいろんな形で連携をとっていきたい。

・架け橋期について

＜委員＞・架け橋期でもいろんな時期のイメージがあるが、子どもたちの発達の状況について、どんな感じが教えてほしい。

・プログラムをやるに当たっては、発達の状況段階が分かっていなかったら、プログラムは作れないと思うがどうか。

＜市長＞・架け橋期の支援というのは、子どもを教育したり、子どもを支援するプログラムというよりも、切れ目なく支援するということを指す。架け橋プログラムの前の呼び方であれば、「小学校1年生の壁」と言われていたもので、就学前と就学後のギャップに対する戸惑いである。

・指の呼び方で例えると、就学前施設では、お父さん指・お母さん指と呼んでいたが、小学校に入ると、親指・人さし指と呼ぶ。このような就学前の対応と小学校の対応が完全に違っている状態で、子ども自身の戸惑いがすごくあることによって、学校に行けなくなったり、学校と距離を感じてしまうということがある。それをなくしていきたいと考えている。

・この思いの1番のベースにあるのが、架け橋プログラムである。だから、就学前から小学校1年生にかけて、周りの指導も、言葉の使い方も、あるいは、その環境の変化に対してもスムーズにしていこうというのが一つのプログラムである。就学前の最年長と、小学校1年生のその移行期をスムーズにしたいというのが架け橋という言葉でつながっているところ。

＜委員＞・では、幼稚園と小学校のギャップを埋めるための取組という形で、その子たちを受け止める期間が架け橋期ということか。

＜事務局＞・その通り。

・個別の発達状況ではなく、5歳児全体の学びと保育の視点において、5歳児から小学校1年生の学びをどうつないでいくかという観点で、それがスムーズにいくためのカリキュラムというような認識で捉えていただければと思う。

・5歳児健診とセンターとの連携について

- ＜委員＞・今年度から始まった５歳児健診とセンターとがどういう形で連携されるようになるのか。
- ＜センター＞・園でフォローしていかないといけない子どもが出てくると思うので、先生をうまく支援していくような仕組みを作りながら、対象の５歳児に対してどういった形でフォローをしてもらえるかということを進めていきたい。
- ＜委員＞・５歳児健診は保健推進課が主体として動かれているが、そこにセンターが関わると考えてよいか。
- ＜センター＞・その通り。関わる内容としては、園や先生の支援である。

・就学前施設間での子どもの理解レベルについて

- ＜委員＞・就学前施設間で子どもの理解レベルの差を気づかされることがある。
- ・例えば、５歳児健診の二次健診は、しりとり３往復が課題になるが、ある就学前施設ではできなかった子は誰もいなかった。ところが、別の就学前施設の同じ年代の子どもを対象に担任の先生に聞いた際、しりとりは絶対無理と言われたことがあった。
 - ・就学前施設間での差は、例えばセンターで、就学前施設の先生をサポートしながら、子どもを伸ばしていったりできるのか。
- ＜市長＞・宇治市の状況は、一学年の中で、９割以上が公立の小学校に入る。一方で、就学前施設は、保育園と幼稚園、公立と私立と様々な機関がある中で、小学校に入る前に、ある一定の学びの場をどこの園にいても確保していきたいというスタンスである。
- ・そこをうまく上げていくということも含めて、乳幼児教育・保育支援センターのコンセプトである。
 - ・成長の部分でもいろいろあるが、その中でも、学びあるいは、就学前の力をどういうふうにつけていくかということについて、その時々課題、例えば、指導指針や指導要領等しっかり位置づけられているものや、それを専門職の園の先生が子どもたちに教えていく力を上げていくことは、このセンターで担っていくべきと思っている。
 - ・例えばしりとりの話のような課題があるならば、それは取り組んでいく。
- ＜委員＞・しりとりは５歳児健診の標準のチェック項目として通過してほしい課題である。
- ・できる前提の、学会や各健診を実施する主体からの課題にも関わらず、できないと言われたので、その対応をどういうふうに考えた方がいいのか、センターでそこをサポートできるのかという趣旨の質問である。
- ＜市長＞・センターで一定サポートしていく。それがセンターを設立した趣旨になると思う。ただ、できなければいけないという健診の問診項目というのは、どの程度できるのかでいろいろ基準があるかと思うので、一律にできないからどうというものではないと思う。
- ＜委員＞・うちの園児たちはできないと保育園のほうで言われたので、戸惑いがあった。
- ＜市長＞・そこの部分についてはサポートしていきたい。
- ・ちなみに５歳児健診の中でやっていることは教育委員会で報告されているのか。
- ＜教育長＞・していない。

- <センター>・まず、3歳児まではどちらかというと身体部分を診るというような健診である。5歳児健診でも身体も当然診るが、発達に配慮を要する子どもを5歳児の中で見つけていこうというのが一つの目的。あともう一つが、就学に向けて、教育に結びつけていくというのが、5歳児健診である。
- ・全国的に国が実施を推奨しており、宇治市の場合は今年度からスタートしている。
 - ・内容としては、まず最初に、保護者へのアンケートを配り、5歳児健診の園訪問を行う。
 - ・それを踏まえ、カンファレンスを行い、二次健診に結びつけていく。
 - ・二次健診で結果的に支援が必要な子どもについては、医療・療育につなげていくのか、または、園で支援してもらうのか、あるいは保健推進課のほうで、その子どもをみていくのか等、いろんな結果が出てくると考えている。これを4月から1月ぐらいまでかけて、実施していく。
- <市長>・保健師等の発達相談や、医者が診察するような健診ではなく、保育園や幼稚園での友達同士の状況もしっかりと踏まえた上で、5歳児健診は判断していこうという形で今年度から実施する。
- ・園での様子は、園に協力を頂きながら実施している。

・保護者という斜めの軸について

- <委員>・保護者としての観点からの意見と、食に対する観点からの意見がある。
- ・幼稚園と小学校の縦の連携、各学校等との横の連携があり、もう一つの軸に、やはり各家庭保護者への連携を入れてほしい。
 - ・例えばこの資料を保護者として見ると、様々な交流事業に関して、ドングリ拾いやピアノ発表会など、どんなことをしたのかすごく気になるところ。
 - ・自分の学校ではなくても、保育参観などで見に行けたり、自分の地域の学校等に対してこんなことをやってほしいという、意見を言いに行くことができる環境ができたらいいいと思う。
 - ・家庭からも一歩踏み込めるような、縦でもない横でもない、斜めの軸の視点が入ることを期待する。
- <センター>・その視点はなかった。インスタグラムで子どもの様子を発信しているが、今いただいたような形も考えたいと思う。

・子どもの権利保護について

- <委員>・センターに期待することとして、子どもを守るという役割がある。
- ・今の時代、貧困・虐待に苦しんでいる子が少なくない。子どもはとにかく自然な姿で子どもらしく生きることが非常に大事だと思う。ぜひその子どもを守るという役割も果たしていただきたい。
 - ・それに関わって、園訪問の機会とか研修の機会です特に子どもの権利保護や子どもを守るという点で留意されているようなことがあれば教えてほしい。
- <センター>・子どもと接する時間が一番長いのが保育士や幼稚園教諭であり、虐待・貧困・ヤングケアラー等に普段接する先生方がいかに早く気付くかが大事だと思う。
- ・そういった事態を早く発見できるような研修等は、このセンターで行っていいと思う。

- ・子ども基本法の制定等、子どもの意見を聞くということも重要視されてきているので、まずは保育士や幼稚園教諭を支援していくということは意識していきたい。

- <委員> ・最近の法律でも、子どもの意見を聞きましょうということを謳われており、子どもの思いとか感想とか、カリキュラムを進めていくに当たっても、聞き取っていただけると期待している。
- ・子どもの思いを吸い上げていただいて、それを適切に分析したり、あるいはブロックの中で共有することにより、うまくフィードバックできるような仕組みが今後できることを期待したい。

・架け橋期における教員のかかわり方について

- <委員> ・学校訪問に行つて授業を見たり、園訪問に行つて子どもたちの活動を見たりするが、小学校では45分という時間が決まっており、1コマが終われば次の教科というようにぼんと変わるのは小学校の授業のスタイルである。それに比べて、幼稚園は、フレキシブルな形をとっており、それが子どもにとってはのびのびできる一つの形になっている。そこは大事にしないといけないうし、その中で子どもたちが育っていくのではと思っている。ただ、小学校でそれをやると收拾がつかないようになり、1年間の教育課程が終わらないことになる。
- ・それを踏まえて、子どもたちが小学校に就学するまでに、好きなことに集中する力を付けていく必要があると思う。それが内発的な動機づけにもつながっていくわけで、自ら進んで取り組む力につながっていく。
 - ・また、これは保護者に対しても言えるが、試行錯誤する力を幼稚園、保育園からつけていくことが大事。それが自分を育てることになり、失敗したということが、学びになっていくのではとも思う。
 - ・最後に、協調性やコミュニケーション能力を就学前から意識して身につけていくことも大事。
 - ・例えば活動後の片づけに関して、就学前の子たちは、時間がかかっても一生懸命集中してやっていることがある。ところが、小学校では注意をして、教室へ入らせたりする。それが小学校のルールでもあり、ほかの子からも、文句を言われたりすることがある。
 - ・その点に関しては、園訪問時に幼稚園はゆとりがあると感じた。少し時間を置いて、その子の発達状況や様子を見て、先生方が声かけをされている場面を見て感心した。
 - ・小学校の先生には、ぜひそのような場面を見て、そういうゆとりを持つ気持ちを持ってほしいし、そういうところを生々の園の活動の中で、学んでほしい。
 - ・そうすると、架け橋プログラムは、もう少し平たんな形で緩い坂状になっていくのではないかと思います。
 - ・今はAIの時代。知識を身に付けるだけでなく、自分でいろいろなことを発見したり、自分で学ぼうとする力をつけないといけない。現在の約半分の仕事が無くなり、AIが肩代わりする、そして新しい仕事が出てくるというようなことがアメリカで言われているらしいが、そんな時代に生きる今の就学前の子どもたちには、先ほど挙げたような力をつけていくことが大事。今度はセンターの取組に大いに期待しているので、ぜひ、充実させていってほしい。

＜事務局＞・小学校と就学前施設とつながりの取組が進んできたところ。小学校でも緩やかに流れる時間を取り入れながら、4月5月ぐらいまでのスタートカリキュラムで子供たちの学びがなだらかにいけるようにしていく。

- ・取組を進めて子どもたちにどんな効果があるのかも小学校でフィードバックし、それを架け橋ブロックの中の就学前施設にもフィードバックしながら、就学前施設で入学に向けてどのような準備が必要か、アプローチカリキュラムを検討する。小学校では持続可能にしていくためにはどのような対応がいるか検討する。
- ・実際に就学前施設の先生と小学校の先生が取組の実践を通して生の声で交流していく点で、実態に応じた連携を作り上げていくというのが理想の形と考えている。先ほど様々な力と御提案頂いたが、そういったことも含めて、就学前施設と小学校との生の連携で活動できるように進めていく。

＜委員＞・保育園・幼稚園の先生方は、今見ている子たちがどんなふうに成長していくのか気にしている。また、小学校の先生は、どういう育ちをして今の状態になっているのかが分からないと、介入や対応が難しいという話をよく聞く。そういう点でこの保幼小連携は、非常に大きなメリットがあると思う。ぜひ充実させていっていただきたいプログラムである。

- ・その子の今後の見通しをもたせてあげると、保育園の先生は「今これをしてあげたらいいよね」というのが分かってくるし、小学校の先生は、「何でこの子はこんなことするんやろう」というときに、「こういうふうになってきて今こうなんだ」という理解ができるだけで、子どもはすごく楽になる。子ども視点の意見になるが、そういう意味で、保育園・幼稚園・小学校の先生が、プログラムで共有しながら向き合っていくことはありがたいと思う。
- ・交流頻度の想定やその回数を増やす見通しはどうなっているのか。

＜センター＞・ブロックごとに会議を開いて今年度何ができるかを検討する。各ブロックの状況によって様々である。無理のない範囲で取り組む。

＜市長＞・貴重なご意見、ありがとうございました。今回頂いた意見も踏まえながら、継続して取り組んでいくためには、しっかりとした形をつくっていく必要があると思う。福祉・教育・就学前施設が同じ方向を向いて意見交換し、親御さんの視点であるとか、いろんな点を踏まえながら、少しずつ取り組めていけたらなと考える。

- ・このセンターを立ち上げた際、公立幼稚園の3園を1園に統合した。2園建物が空いており、具体的には木幡幼稚園を少し改修して、不登校の拠点という形で活用していく方向で進めている。遊戯室は検証に最適の場所。基本は不登校の拠点として位置づけながらも、これと乳幼児教育・保育支援センターの実習・研修の場という形でも活用していけばいいと考えている。改修工事中のため、来年度に向けて、いろんなプログラム等も考えながら、場所等も充実させていきながら取り組んでいきたい。今後とも子どもの環境づくりを皆さんと一緒に進めていきたい。

4 閉会